

三河アララギ

平成二十四年

五月号

第五十九巻 第五号



ニューヨーク日記(67) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

February 7, 2012 : Jin Patisseriein LA

Blue Shoe Diaries



ShoeLadyお仕事でLAに行っていたのでJin Patisserieからお土産頼んでおきました！パティシエのクリスティーチューさんは以前スチュアーデスをやっていて世界を旅している間に色々な味に出会ったらしい。クッキーやケーキも好評なんだけどその中でも彼女のチョコレートが美味しいの！色々なカルチャーの影響がある味がとっても上手に取り入れています。今はロスにしかないけどもうすぐオンラインで買えるようになるらしい！

ShoeLady was in LA for work so I asked her to bring back some goodies from Jin Patisserie! The patissiere, Kristy Choo used to be a flight attendant and had traveled the world getting her taste buds inspired. And it reflects in her work. I think she achieves creating these wonderful cookies and chocolates that highlights the flavors without overpowering the base. Her lavender cookies are really well done without ever feeling perfumey. Her greentea cookies have just enough bitterness that makes the cookie elegant in flavor. And her chocolates! Mmmm her chocolates are so smooth, just the perfect sweetness and has a clean finish leaving enough of a hint to reach for more.

目次

第五十九卷第五号(通卷七〇二号)

表紙 ホトケノザ	今泉 由利 (1)	Vサイン	小野可南子 (27)
ニューヨーク日記(67)	Blue Shoe (2)	某場町また亀井戸	夏目 勝弘 (28)
感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」	(4)	空き缶	秋山 逸穂 (29)
歌集「本の木」	杉浦 弘 (5)	東西南北	白井 信昭 (29)
「二夜酒」	岡本八千代 (6)	『ことよせ』	いーはとぶ (30)
仏の座	今泉 由利 (7)	雛飾り	阿部 淑子 (31)
春よこい	伊藤八重子 (8)	さくら餅	富岡 和子 (31)
山里	青木 玉枝 (9)	『俳句』	植村 公女 (32)
一人の世界	弓谷 久子 (10)		一石 (32)
とみに美し	内藤 志げ (11)		喜仙 (32)
わが母は	北川 宏廸 (12)		皓一 (32)
「鴉の囀」	佐藤 喜仙 (13)	『私の一首』	夏目 勝弘 (34)
合格	安藤 和代 (14)		林 伊佐子 (34)
春は遠きに	伊藤 忠男 (15)		平松 裕子 (35)
杉の花粉	林 伊佐子 (16)		山口千恵子 (35)
新しくなる	金津 文枝 (17)	贈呈誌	
臺立ちて	清澤 範子 (18)	和歌から派生した季語の本意(その二十二)	佐藤 喜仙 (36)
春菊	半田うめ子 (19)	絹の話(18)	今泉 雅勝 (37)
春雨冷たし	近藤 映子 (20)	物理学者と詩歌の世界(28)	今泉 一石 (38)
知らぬ間に	伊与田広子 (21)	短歌に詠まれた茂吉	鮫島 満 (40)
うらうら	胃甲 節子 (22)	山の辺の道への思い(2)	夏目 勝弘 (42)
鎮もり	杉浦恵美子 (23)	「水魚」のことから(136)	岡本八千代 (44)
母を	平松 裕子 (24)	ことのはスケッチ(40)	今泉 由利 (45)
絵はがき	山口千恵子 (25)	和菓子街道(67)	平松 温子 (46)
	(26)	お知らせ・編集後記・三河アララギ規定	(47)
			(48)

感 銘 歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」

寂しさはとことばにしてこけしだの稚き萌えのくれなるを踏む

P
196

しづまれる幡豆のみなどの家畑梅雨にたほるるは人参の花

P
197

歌集 「一本の木」

杉 浦 弘

年に一度相会ふことをもくろみてわれはたどりき津軽下北

相思ふ人失ひし悲しみも三年となれば淡々として

もろともにあり経ることの我を支へ妻を支へてひととせは過ぐ

「一夜酒」
ひとよざけ

蒲郡 岡本八千代

ひととせ
一年を三月十一日過ぎゆきて庭に馬酔木の花の垂房

アシビの花べに紅も白きもそれぞれに垂れて花咲きゆれてゐるかな

アシビ咲けばすぐまたおもふ子規よりの「馬酔木」「阿羅々木」の歌誌の名前を

一袋を夫とわれとに分けあひて今宵は君の甘き「一夜酒」
ひとよざけ

其角の句に「一夜酒」ひとよざけとふあるらしきあま酒甘し春の一夜の

君よりの「一夜酒」とふ甘酒にあたかも酔ひたる心地こそすれ

啜りあふこのあま酒の「一夜酒」夫はいったい何をか思はむ

絵の会の終りと出でゆくわが夫の後ろ姿をけふは見てをり

その時はその時と今は君に言ふ小さき茶房の窓あかりの処
とこ

いただきし夫の花束の花々のにはひは夜更けて寝どころにまで

仏の座

東京 今泉 由利

雪原は向かうの山まで続きゐるまつ白をゆくMAXとき号

天の雪地上の雪ただに白片足立ちの白さぎ一羽

雪深き越前に来し今日の日の春となる日の雪割草

どこまでも白の田んぼの白靄しろしろ白動く白鳥の群

もう一度身に受くことのありやなし雪後晴のちの夕日輝やく

八国の山の起伏の尾根伝ひ心に留むこの日のことは

冬木々の枝々伝ふめじろ見ゆコナラの落葉厚く敷く処

冬枯れの枯れ枯れ畔に見つけたほとけざり仏座します三階の草

哀しさをもひとつ加ふ吾亦紅常に咲きをり私の内に

仏の座クリスマスローズ露の臺ひと日の履歴アイホーンにあり

春よこい

豊川 伊藤八重子

犬山城真正面ともに見つつ往く路地に花の咲く如「餅」もちひの木飾らるる

音たてて足踏み縫ひし黒ミシン縁側にある前を通りぬ

木曾川の河面に映る白帝城見上げつつ往く子の住む犬山

ぼた餅とお稲荷さんとぶら提げて朗らかに夫帰り来たれり

犬山の子の庭に摘みし芹若葉今朝の吾家の味噌汁に香る

凍傷しもやけの痛し痒しよ足指のい一つ本いっぽんあはれ揉みほぐす

樂しみも苦しみもなべて淡くなり卒寿を超へし夫と居並ぶ

三家族の我家に集ふを樂しみに春を待ち居り紫木蓮咲く

草刈機押しゆく長おさの子六十路ゆく後継ぎ無きを誰わかもが言はず

住跡より水仙菜の花雪柳採り来し子の手にひと抱えの春

山里

新城 青木玉枝

老いて知る寂しさのみがゆすぶりて今日のひと日も暮れてゆくなり

裸木は風^{はだか}にまかせて右左われも同じくよたよたのひび

山里の過疎^{たつき}の生活の村人の多き老人^{おいびと}若者見当らず

雪の原この山里に外燈がポツンと一つ静かに照らす

積る雪消えない中に又降りて初めて見たり積雪の里

残生は如何なる事やわれに問ふ終^{つい}のすみ家となるもよしかな

生と死のはざまに思ふわが生きし九十年のうたかたの夢

伊丹を出で二ヶ月すぎぬ独り居はこの山里に風の沁みゐる

むなしさと悔いの過ぎゆく日びなるに呆けが私を追ひかけて来る

山里の空気のうちさ夜の空星まできれいに見える嬉しさ

一人の世界

豊川 弓 谷 久 子

みさとの画きしお内裏様の絵手紙を棚に飾りぬ我がひな祭り

弥生とは名のみ寒さ淡雪は何時か氷雨と変りてゐたり

せん無き事思ひあぐねて日の暮るる思ひて見てもせん無き事を

雀の声に呼び起されぬ珍らしく夜明けを知らず眠りてゐたり

衰へし視力の悲し飽きる程本読む暇のある身となりて

一人来て一人の花見奥山に一月遅れの白梅の花

散り初める木下に佇ちぬ人影の無き梅林の一人の世界

故郷の文殊祭りのなつかしさともども語らむ姉の枕辺

吹き抜ける風未だ寒し一握り土筆摘みゐる丁田の土手に

吹き下ろす御津山嵐に逆らひてペダル漕ぎたり力いっぱい

とみに美し

豊川 内藤 志げ

待ち待ちし梅の花なり今の年はとみに美し二月の尽に

マルチ掛け夫と並びて鋤を振る雨ふくみたる土の重たし

地下足袋のままに温もる作業場の椅子に凭れて椿と向き合ふ

陽暮れまで未だ間^まがあると思ひつつ紅き椿の揺るるを眺む

雨ふくむ畝間の土に長靴を沈ませ行き来玉蜀黍の畑

泥濘^{ぬい}を行き来したりき玉蜀黍の畝の間の土は鋤を弾かす

キャベツより飛び立ち隠るる鴨はわが追う声にも静もりの中

空き家の荒ら庭に咲く寒あやめ暫らく眺むこの紫を

藪の上グライダーを思はせる鷺の一羽が東に向ふ

「あ鶴だ」声に振り向くバスの中雪空を舞ふ鶴は一瞬

わが母は

東京 北川 宏 廼

わが母は大正9年1月1日に生れ平成24年3月3日に身罷り給ふ
臨終は3月3日の午後3時30分九十二年の生涯なりき

明日は玲里の試験日よね行っておやりこれがわれへの最後の言葉
わが妻は玲里に付添ひ娘裕子と代る代るにインドネシアのジャカルタへ
母の最後を看取りしは誼子と敬子われ東京よりの新幹線の中

「困難が人を宝石にする」これまさに母の信条母の人生

生れ方は一つなれども死に方は人さまざまよ母の口癖

照子叔母はいふお母さんは頑張り屋さんよくがんばったからもういいのよ
当り前を当り前にすることが当り前ではないのよね

写真の母は喪主のわれを背後からいつものやうに見守り給ひぬ



本棚より「三河アララギ」この一年を冥途の連れに柩ひつぎに納む

恵順院釋尼慈芳が頂きたる仏となられし母の法名

母は恵順院釋尼慈芳となり父榮順院釋廸浄じやくじやうと並び給へり

これからは「三河アララギ」を母と思ひ毎月歌をつくらむと思ふ

われもまた九十二才まで生きやうと心ひそかに決意を固む

「鴉の囀」

東京 佐藤喜仙

淡雪の屋根に積もれど翌朝の雫の音に春を聞きをり

昨日の雪は早くも解け初むる屋根や木々から囀りしげし

二ん月の寒き御園をたもとほる春小金花・金縷梅咲けり

子供等の遊ぶ声より遠からずふくら雀の餌あさりをる

早春の山城址の楚石踏むはるか昔の宴思ひつつ

婚近し枝の先まで梅真白花嫁御寮祝福の中

春立ちて尼僧の黒衣軽々と動き廻りしトラピストの丘

人生の歩み来し道七曲八曲して後は直なる

いづれ去るその日の為に身の廻り妻に悟られぬやう整理する

鴉数羽声を高きに鳴き交すこれ囀か春は近きに

合 格

豊川 安藤 和代

寒き夜はかまど麦飯ちゃんちゃんこ薪割る祖父の姿顕ちくる

とよ川に白鳥六羽睦まじく皆川上に向きて動ぜず

眠られぬ夜は幼日を思ひ出す夢も幼き友と遊べり

作物を荒すと嫌わる鳥なれど鶉のあの賑やかさが好き

鶉の声聞かぬ日は淋しくてこの大空を見渡してをり

久びさに口紅させば「ワアきれいー」孫のひなのがやさしく笑ふ

春の畑ペンペン草に天道虫二ひきのをりて抜くをためらふ

いづれにも個性のありてゆで卵つるりむけるもゲジゲジもあり

ネールサロン入るか迷ふ老いの身はわづかな事にも勇氣がいるよ

猫柳蓑虫ひとつつきしまま玄關飾るそれも又よし

暖かき日びの続けば菜の花の黄色に吾も染められてゐる

高校生活にすべてをかけて今孫は大学合格バンザイ叫ぶ

春は遠きに

大阪 伊藤忠男

鴨川の流れ静かな春の宵小石なりとも川面を揺らす

人と人支えがありて人と言う肩寄せ歩むそれが人なり

ぬかるみも信ずる道に自信持ち均し進めば夢拓くなり

雨音に眠り覚まされ寝つかれず今は恋しや穏やかな春

放射能浴びても檜逃げられぬ若芽膨らみ花粉飛び交う

冬を耐えやつと踏み出す春の道身体からやか気もそぞろなり

道草も時と場合で彩りに脇道の花摘むも楽しや

2円ほど安きスタンド耳にして車走らす10キロ道

テレビ画に速報出るたび恐さ増す地鳴り地響き耳澄ます日々

春の陽の温もり消すか北の風いつまでまたす花メール便

杉の花粉

岡崎 林 伊 佐 子

黄砂にも似て山峡に吹きあぐる杉の花粉の風向きを見つ

風たちて雄花の花粉が飛散するその杉山に夫と働く

有刺線をネットを張りて獣らの被害を防ぎ椎茸栽培

椎茸を背負いてくだる山道に竜の髭くむ野うさぎのあと

岐神にはひらがな文字の道しるべ苔碑となりて山深くたつ

土浅く潜みてゐしか露の臺やけし苞むく指先染めて

吾のみの指紋つきたる大根を穴深く掘りて畑に囲ふ

お彼岸の墓にぬかづき幼な日の母の面影浮び哀れむ

年若く逝きませし母の残したる形見の手帳の遺稿をしのぶ

死に近き母に抱かれて眠りたるをさなの記憶は永久に忘れぬ

新しくなる

島根 会津 文枝

路地の雪足跡は新聞を配達の十年若き近所の主婦よ

イタリア旅行にて次男の嫁は小沢征爾先生に出会い頭の低い立派な人と

誰れでも気さくに話される小沢征爾先生外国で日本人出会えた喜びと

午前八時三十分三男は毎日必ず電話し私の体の調子を気付かい呉れる

六曲の屏風を部屋に立てにけり寒さは少し柔らく心地

カルストの野焼の火は風に走る害虫も草の芽も新しくなると

夜の町を猪は走り廻るとタクシーの運転手さんの話

ドナルドキーンさん八十九才日本人になられ鬼怒鳴門と

キースドナルド

福祉専門学校卒業式参加生徒の髪飾り点灯にキラキラ光る

心に残る講演は必ずメモする日記帳に私の癖

臺立ちて

春日井 清澤 範子

剪定し椿の縮れた小枝には柔らかき新芽につやつやの若葉
葉はたんの花は紅白それぞれに春の陽差しに臺立ちて来ぬ

車から降れば娘は吾の手を引きてくれるその手の暖かきこと

雨上り若草生ふるその中にスイコキの赤堤防の色どり

吾が夫は脊柱管狭窄症の手術せしも町内会計の事務をするなり

武者隠し付くる部屋にて町内の会計事務の出納簿を書く

モーニングコーヒー一切のパンバターは溶けて浸みて美味しも

寒の戻り吹く風音の強くして風は北の雨戸をたたく

剪定し縮れ伸びたる小枝にも新芽出で来ぬ春遠からじ

吾が通ふ病院へ夫とバスに乗る見慣れた景色緑濃くして

春 菊

新城 半田 うめ子

春菊の花咲きて居り黄の色の朝陽に輝き美しく見ゆる

庭中のパセリを摘みぬ味のよく味噌汁の中へ入れて食むなり

前庭に数多に咲きし小さき花大根草の紫の花

露ふきのとう数多に生ふる前畑を楽しみながら数へつつ歩く

今日も又岡崎よりの味のよきおはぎを多く頂きました

行き暮れて千種の森に一夜過ぐ義母と二人若き日なりき

若き日にて草鞋わらじ作りて人々に差上げますと楽しみて言ひし

新城に誘拐犯人居ると言ひ逮捕するとの言ひて居るのみ

稲木いなにて警官と言ひ一宮迄誘拐犯人追ひて来たりと

春雨冷たし

名古屋 近藤映子

毎月の月の始めの我娘超過勤務の帰り待ちをり

残り咲くシクラメンの紅花の根本にすでに小さき蕾

春雨と言うには今年の弥生雨冷たく冷たく感じたり

三月と言えど冷たき十日過ぎ彼岸参りに息子等来ると

思い出すこの八階に我一人夫想いつつこわき地震を

夫見舞ひ冷たき手足を擦りたりほんのりぬくもり感じつつ

わが居間の小さき鉢のシクラメン一輪二輪の紅色愛らし

白き根をペットボトルに伸したて弥生中葉ダチュラの咲く

ストーブをつければダチュラ室内の対流にゆれ此の夕べ

春彼岸息子夫婦と墓参り東名高速走りて西明寺に

知らぬ間に

豊橋 伊与田 広子

日当りの居間に籠れば温かき外は寒きに彼岸も過ぎて

知らぬ間に梅の蕾のほころびはじめ雨戸を閉ざす北側の庭

外出を止めて居間にて閉じ籠る暗くなりて文字も読めなき

知らぬ間に雨降りたるらし舗装路の濡れているなり我が家の辺り

食料品両手に持ちてバスに乗る行きは歩きて帰るはバスに

近頃は猫の来ることなくなりて一人暮しのわれは淋しき

牛乳を湯呑みにうつしわれは飲むラッパ飲みより味の良きなり

高低差どの程度かと歩み行く津波の心配考へながら

避難所の高き所へ競ふならむ三階行くは無理かと思ふ

地震には強きと思ひ建てし家被害なければ二階へ上がらむ

うつらうつら

豊橋 胃 甲 節 子

春霞弓張山系裾野迄優しくつつみて今朝はうらうら

音も無く硝子越し見る椿の葉先きらり光りて雫落ちゆく

潰れたる脊椎一本の故ならず吾が背の丸みいよよ増し来る

正座出来ず炬燵に拠れる歳月の重さにあらぬ背の丸み増す

五箇月目杖を恃める二千歩は未だ寒々しき冬景色なり

広々し田圃の中に芽生へ初む小麦のみどり清けきみどり

腰椎のオペ終へ痛み完全に取れしと云ふ妹よ本当によかった

抜糸終へし妹より電話受けにけりカットに行きて転院すると

ぼたん雪しき降る東京ビル街に孫は今頃どんな仕事か

飛来する梅の花びら朝々に掃き寄する事は楽しきひと時

鎮もり

蒲郡 杉浦恵美子

この家にひっそり生きてる三匹のメダカと我と天井鼠ねずみ

夕食は青海苔入れた雑炊をテレビ見ながらこれで三晩目

夕食を美味いか不味いか自らに問ひ掛けたって虚しいばかり

鶯が今朝鳴いたよと声掛くる夫が居ぬのが何とも侘びしき

書棚角「楡家の人々」見付けたり到頭あなたは読まずに逝った

読了日書き込みである若き日の夫の蔵書の膨大なこと

えっこんな難しい本読んだの今更ながら夫の知識欲

甘きもの殆んど食べざる夫なりき供へし牡丹餅鎮もりてをり

然らばと北極圏の缶ビール供へてみても鎮もりしまま

数日も籠りて居れば人恋しさりとて誰に会ひに行かうか

母を

豊川 平松 裕子

眠りゐる母に顔寄せ呼ぶ我に目覚めたる母は弟の名を呼ぶ

竹の子を掘ったよとのメール届く雛の祭りの明日といふ日に

これ程の贅沢は無しと遅き夕餉夫は初物の香り喜ぶ

声にならぬ声にて我に訴ふる母は我が手を強く握りぬ

苦しさに起き上がらむと我の手を強く引き寄す母の手力

やうやくに眼閉ぢたる重篤の母の傍らを少し離るる

眼閉ぢてと願ひてをりて眼閉づれば再び開かぬことを恐るる

苦しまぎれに叫ぶが如き言葉にもお母さんお母さんと母を呼びをり

重篤の時を越えにし母のこと思ひつつ今日は苺ジャム煮る

カーテンを透して見ゆるほの明かり月とし見れば起き出で開けむ

絵はがき

豊川 山口千恵子

厨辺に清しき香の漂へり残れる一つの柚子を絞りぬ

下枝より庭の梅の開きゆく午後よりくもり又雨の降る

窓打ちて降り出したる夜の雨馬鈴薯植うる予定の狂ふ

高く高くクレーンに吊りて作りゆく自動車走らす高架の道路

干涸びて下がる房実風に揺るる今しばらくは冬木のエンジュ

家族四人一台のバイクに乗る凶柄ベトナムよりの桃子の絵はがき

青き群一夜に霜にうたれたり摘むべきアロエ根元に探る

瑞々し黄の蕊上にころがれり土にあかあか藪椿の花

散り落ちて全て上向く藪椿掃き寄せてゆくくれなるの色

うず高く津波被害の瓦礫の山日常失ひし人々のもの

Vサイン

豊川 小野可南子

みずたまりに雨小止みなく降り続くその雨の輪は江戸小紋柄

フロントガラスに触れむばかりに撓ひ垂る赤錆色の杉の下枝

赤人の詠みし柳の枝垂れ枝の浅きみどりの糸とはこれぞ

マグカップに注ぐコーヒーのこのかほり朝餉のあとの一つの区切り

指先のさかむけ浅く細くなる厨の水の温みこしかと

牡丹の木の節ごと小さきくれなるのやや柔らかきは花芽とぞみたり

供花抱へ二人の孫に遅れつつお中日とて明るきひかり

プールサイドのババを時々見上げつつ未だ危ふし佐真の泳ぎ

二十五米泳ぎきりたる千尋なり我に向ひて小さくVサイン

枯葉色の苞を破りて若萌えのあじさいの葉のまるまるとして

某場町また亀井戸

豊川 夏目勝弘

伊藤左千夫の住みぬし跡を探さむと錦糸町駅案じつつ降りる

昔からここに住みぬしか先づ尋ね今日幾人目ぞ職人に聞く

本所にて八十余年のコーヒー店に聞けばわかると古戸を引きぬ
区役所に携帯かけて五分待つ錦糸町駅のすぐ前なりと

二万歩を探し巡りしも無駄ならず松倉米吉の住みぬし跡みつ

天満宮に梅見る老いに声高め左千夫の墓はと繰り返へし聞く

膚色のあせし小振りの御墓にはまだ新しき花供へあり

墓石と塔婆たち立つ間より曇りと同色東京スカイツリー

子規ほめし牛飼の歌のその歌碑はシロの繁りに隠れてゐたり

胸までの洪水のなか両国まで牛ひき行きし跡を辿らむ

あき缶

「招待」 秋 山 逸 穂

凍りつき朝日にひかる残り雪の面を擦りて風吹きつづく

枯原の遠くに見ゆる鷺の群れにとびはね遊ぶ動きはあらず

荒き風ほこり巻き上げ過ぎゆけばからころりと空き缶走る

音たてて電線ゆらす春一番あとひといきにて桜咲くだろう

深深と暗さの重なる林なり春一番をも押し込めている

東西南北

豊川 白井信昭

電線の唸る音聞く部屋のうち今日を荒ぶる春の嵐の

庭仕事いっとき手を止め東に黙禱をする午後二時四十六分

時間には束縛されぬを良しとして雨の日もゆく丸山海岸

豊川のゆたけき流れ見渡する展望室の東西南北

『いっよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

わが庭の小草萌え出でこの朝の四温暖かき中にたたずむ

吉見幸子

なかなか屋根には上がらぬ孫の抜け齒拾ひては拾ひ孫に手渡す

牧原正枝

はや今年も初不動祭と電柱にはり紙してあり見ながら通る

岩瀬信子

「鬼は外」言ふは何やら声ひそめ福呼ぶ声は大声あげる

石田文子

わが幼なむかしばなしの桃太郎に「島から姫をたすけました」と

山崎俊子

西行の「ねがはくは」の歌思ひつつ坐りたりこの涅槃図の前

三田美奈子

大根も残り少なくなりにつつ寒の畑に五つ六つ白し

稲吉友江

傘さして杉本美術館の庭に佇つくれなるの梅「鴛鴦」えんおうにふる雨

鈴木美耶子

雛飾り

横浜 阿部 淑子

暗くして狭い箱にてお疲れさま雛様ねぎらう幼わが孫
雛飾り八十回目を迎えたり姫のお髪もうすくなられて
意を決す四十年ぶりの仲間入りレーンに投ず七ポンド球
春風にのりくる快音ポンポンとテニスコートにはずむ若達
地は揺るる豪雪なだれ後たたずタンポポの花如何に待たるる

さくら餅

東京 富岡 和子

婆様ばばさまの与えし雛は雪の里へ愛でる孫娘は五十肩にか
贈られし雛様仕舞う朝にして幾許過ぎし義姉をし偲ぶ
金星と弓張月とジュピターと並ぶを眺むさくら餅持ちて
小庭辺の立ち木のうえに三日月が木星金星両手の先に
胡瓜とカルシウム錠との香りして見えねど来るよ猫のジョンは

「俳句」

俗名となりし樞や春の雪

植村公女

ふらここの内緒話のすれ違う

子の無くて小さき雛小さき影

西望の魂燃えて花咲けり

（彫刻家北村西望の作品を観て）

一石

瞬間の真実見つむ紅梅や

うきうきと春の誘ひを受けて行く

新たなる発心の色猫柳

喜仙

二シ月の尼僧の動き軽やかに

億年の星の幽かや春愁

特養の隅にひとと花こぶし

皓一

三寒や人もまばらに平林寺

線香を花を手手に手に彼岸かな

私の一首

帽子とり汗ぬぐひつつ石段見上ぐ丈ある草のもみづる一本

夏目勝弘

今一度、三河アララギの原点である万葉集に戻ってみようと思い立ち、万葉集の歌の現地に行き、何かを感じることが今後のプラスになるのではないのか。

千数百年前と現代とは、違うことはわかっているが、変りないものは風土であり、人間の思いである。その思いに何かが感じられるものがあるのではないかと、一年余を万葉の地を訪ねている。

まだ暫くは続けてゆくつもりである。

木守りともなりて残れる柚子の実が古家の庭に年の瀬を越す

林伊佐子

「木守りは」、次の年も実のなる事を願って残しておく古い習慣です。朝日に黄熟に輝やく光影が美しく心をひかれて一首にしました。柚子は、香気と酸味があつて料理にも使いますし、ジャムにして、熱湯にとかし風邪の予防薬として飲んでおります。霜がおりなかったので師走すぎても、庭にいつまでも残っております。今は、柚子の実を食べる人も少なくなつて、どこの家にも残されております。

眠りゐる母の傍に目を閉ぢて眠れる人形の髪乱れをり

平松 裕子

病室の母のベッドの上には動物のぬいぐるみが数個あり、それに加えて眠り人形（ミルク飲み人形とも）が置いてあります。置いていつてくれた方がどなたかも知りません。母はそれらを本当の人間の子供達だと思っています。「この子たちの親はどこへ行っちゃたのか。」と真顔で言われることがあります。人形の髪が乱れているというのは、母がなで廻わすからだと思います。最早正常でない母の仕草が伝わりますでしょうか。

常の日に戻りし朝の日に子らの寝ゆきし布団干したり

山口 千恵子

正月に里帰りした子の家族が帰っていった。子や孫たちのつかった夜具を朝日に広げ干した。一抹の寂しさもふつと感じながら……。

健やかに暮らしている様子に安堵しつつ、私もまた今日から、一年を元気に暮らしていこうとあらためて思ったことでした。

贈呈誌 三月号

「愛媛アララギ」

濱田正敏

いちめんの姫百合たちまち紫の桔梗と変りし原野なつかし

林好昭

飛行機雲まじはる空を眺めつつ大阪に職得し孫を思へり

「鹿児島アララギ」

福仲功

腰少し曲げて車椅子を押す妻のゆるゆる歩み見るも楽しき

南和男

片側に雪の残りし路地行きて堅き靴音をみづからが聴く

「高知アララギ」

小松基壮

満開の菊が夕日に包まれて多忙続きし年も暮れ行く

秋山正美

くつきりと浮ぶ満月ながめつつ赤信号にしばし佇む

「滋賀アララギ」

榎並太一郎

立ち止まり太一さんかと確かめるをみなは変らぬやさしき声に

関谷末吉

「金の生る木」に花咲けば玄関に寒さを避けて来む春を待つ

「冬雷」

小宮守

光りとも紛ふ魚らの跳躍もをさまりて暗くなりゆく海面

赤羽佳年

見えぬ身に黒子の数を殖やしつつ老年に入るまた除夜がきて

「柊」

滝見有三

コウノトリ飼育準備に余年なき村に田の神まつるひそかに

服部忠夫

差し当り煩ひもなくここち弾むおもひもなく歳末となる

「群山」

高荒啓中

細やかな八ッ手の小花運びある蟻の小さき黒目鋭く

西野良也

鳥居際の銀杏の黄葉が照りそめぬ明けゆく空の光とどきて

「榎の木」

樋口光司

砂利道にガードレールも無き天城路飛ばして往きき吾子に逢はむと

荻野敏音

甲州の吊し柿見むと子ら誘ひくれしが今日は血圧高し

「穂の原」

松井花子

飲み物にて飾り終れるお雛様先づはお水を織部の湯呑

荒川榮子

冬ふかみ見知らぬ鳥のエサ探し風音立てるざわめきの木木

「かさね」

川井素山

冬の霧佐渡をかくして音もなし

安藤虎醉

金色に細波染めて初日の出

和歌から派生した季語の本意（その二十二）

「かさね」「笹」 佐藤 喜仙

63 卯の花（空木^{うつぎ}の花、卯の花垣・花卯木^{うつぎ}）

「春されば卯の花くたし吾が越えし妹が垣間は荒れにけるかも」

詠人知らず（万葉集）

「神まつる宿の卯の花白たへのみてぐらかとぞあやまたれける」

紀貫之（拾遺集）

卯の花は空木^{うつぎ}の花のことであり、二メートルに満たない落

葉低木で庭園や垣根に植える。万葉集の歌で詠まれている

「卯の花くたし」が後に初夏に降る陰鬱な長雨を云うようになり初夏の季語となった。

例句

卯の花は日をもちながら曇りけり

千代女

押しあうて又卯の花の咲きこぼれ

子規

卯の花や流るるものに花明り

たかし

64 更衣

「花の色に染めし袂の惜しければ衣更へうき今日にもあるかな」

重之（拾遺集）

「夏くれば衣がへして山賤のうつぎ垣根もしらがさねなり」

藤原俊成（久安百首）

更衣は宮中で陰暦四月一日に行われていたものが、一般的に広まったもの。俳句では単に更衣と言えば夏への更衣のこととて、冬への更衣は後の更衣と言う。

例句

衣更て坐つて見てもひとりかな

一茶

すゞかけもそらもすがしき更衣

波郷

衣更へて肘のさびしき二三日

耕二

65 滝（滝見・滝しぶき・滝の音・滝道）

「石ばしる垂水の上のさ蕨の萌えいづる春になりにけるかも」

志貴皇子（万葉集）

「飽かずしてわかるる涙滝にそふ水まさるとや下は見ゆらん」

兼芸法師（古今集）

滝のことは万葉時代には「垂水^{たるみ}」と言った。平安時代に入ると現在の滝と同義に使われ出したようである。華嚴の滝、

那智の滝などの雄大な滝から、思わぬ山中に一筋の瀑布となる美しい小滝まで日本には多くの滝がある。

例句

神にませばまこと美はし那智の滝

虚子

滝の上に水現れて落ちにけり

夜半

瑠璃沼に滝落ちきたり瑠璃となる

秋櫻子

絹の話 (18)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

絹と原発

哺乳類と昆虫は恐竜が活躍した時代が過ぎて、数千万年このかた素晴らしい発展を遂げて今日に到っています。

大隕石が地球に衝突した砂塵で長く続いた薄暗い世界も次第に明るくなり、地球を取り巻くオゾン層も今日の様になって、紫外線Cの様な有害波長を遮蔽出来る環境が整い、大陸移動や、幾度かの氷河期を越え明るい柔らかな太陽の光が降り注ぐ揺り籠のような奇跡の星が今日の地球です。

しかも2万年來次第に温暖化して来て、針葉樹中心から広葉樹林帯が広がり、栄養豊かな葉、美しい色とりどりの花と蜜、その実が昆虫とは乳類にまたと無い樂園を与えてくれ、一気に子孫を増やし栄華を極める事になったのです。

ところが人類の発展の歴史は開発と称して、自然を傷めつける歴史でありました。古代は木材を、近世になって石炭を掘り出し、近代になって石油を採掘し、それらをふんだんに

使って便利で豊かな生活をエンジョイするに到りました。遂に今日になって地球はひめいをあげはじめています。

温暖化が始まり、地上の生物を守ってくれるオゾン層に穴があく事態も起り、異常気象が頻発し、その対策に頭を痛めておりますが、現状を維持発展させながら元の地球環境に戻そうと云う虫のよい妙案はないでしょう。

更に昨今ウランを手に入れ、最終処理方法も見つからないのに原子力発電などを始めました。

原子力発電による電力の増産は照明ばかりでなく暖房、ドアの開閉、風呂やポットに至まで電気器具の大発展を促しました。更にテレビ、パソコン、携帯電話、身体検査のスクリーン等オゾン層で遮られ地上に到達しない短い波長の電波を人為的に作り世界中を覆い尽すまでになっています。

また一方石油製品の衣料品も安易な破棄処分は深刻な環境汚染の原因の一つになりつつあります。

火の玉であった地球が森羅万象色々な物を地中深く埋蔵し危ういばかりの均衡の上に保たれている繁栄なのですが、それらを掘り起こし、寝た子を起す様な事を始めた人類に本

当の未来は有るのでしょうか？

昆虫はどうしているでしょう！

絹糸昆虫のヤママユガ科の野蚕は吐く細い一本の糸に200個位のナノ構造の孔を作り更にその孔の中に繊毛を備え、タンニンと云う色素を糸の中に取り込み紫外線の様な遺伝子に影響を与える短い波長の光を反射吸収しています。光ばかりでなく電磁波、臭い、熱など多少の差はあれ自分に都合の悪い分だけ（100%ではない）宇宙のブラックホールの様にどこかに処理してしまいます。この機能は解明されていませんが地球上生物では他に例を見ない驚くべき機能です。さらに蛹から成虫（蛾）になる迄の休眠ホルモンは同じ親の卵から1年後、1位年半、それ以上のものなどバラバラで、羽化し、その時の環境でどれか生き残れるよう仕組んでいるのです。その間、繭の中は乾燥せず、雑菌にも紫外線にも侵されず安全なゆりかごです。

この繊維を使い危機迫る地球上で少しでも安全安心な衣料品：紫外線、電磁波、放射能（未確認）等防止、低体温、熱中症予防、皮膚荒れ防止、衝撃緩衝、汗、体臭吸収、外傷

化膿防止、発癌予防などを一枚で可能にする…を早急に作り普及させる事が懸命と思われます。この繊維は皮膚の老廃物で汚れにくく洗濯も綿の1/4ですみ手間が省け省エネです。摩擦などには化学繊維には適いませんが、そんなことを言っている時代では有りません。昆虫の住める広葉樹林を増やし、その恵みをいただき、共生する仕組みを作る事が、健康で原子力に頼らない省エネ社会を育てる一歩ではないでしょうか。

災害避難時に放射線から身を守り、低体温などに陥らず洗濯や入浴頻度を減らす下着を一日でも早く完成させたいと思います。

これらの品は少々単価が高くなりますので、各自自治体の高齢者の数だけ備蓄したらどうでしょう。着る人のメリットばかりではなく支援する人達の省力化にも寄与すると思われるます。

ただ自然界の物はその機能性が100%と云う物は有りません。それが自然との共生と云うものでしょう。

昆虫に教えを乞う事はこれからも沢山有るでしょう。

物理学者と詩歌の世界 (28)

一石

南部 陽一郎

我が国の理論物理学者3傑を挙げよといわれれば、筆者は躊躇なく湯川・朝永・南部をあげたい。南部陽一郎(1921—)は、日系アメリカ人(一世)の理論物理学者(専門は素粒子理論)。福井県福井市出身。シカゴ在住。60年代に量子色力学と「自発的対称性の破れ」の分野において先駆的な研究を行ったほか、弦理論の創始者の1人としても知られ、現在の素粒子物理学の基礎をなす様々な領域に独創的なアイデアで多大な貢献をなした。とくに「自発的対称性の破れ」の発見により、08年にノーベル物理学賞を受賞。

東京市生まれ。2歳のとき、関東大震災に遭遇し、父の実家のある福井県福井市に転居。父吉郎は福井県内の高校で英語教師を務めていた。第一高等学校に補欠合格し、同校3年のとき湯川秀樹の評判に刺激されて理論物理学の研究を志し、東京帝国大学に進み43年に卒業。終戦後に東京帝国大学の理学部物理学教室に嘱託で復帰し、朝永振一郎の研究グループに参加し朝永の方法を吸収した。朝永はコペンハーゲン学派の自由な研究を持ち込んだ仁科芳雄の下にいた。50年、朝永の推薦で東大出身の若手とともに大阪市立大学に理論物理学のグループを立ち上げた。52年にプリンストン高等研究所に留学、2年間滞在(当時の所長はR・オッペンハイマー)の後、54年にシカゴ大学の核物理研究所に着任。同研

究所には小柴昌俊(02年ノーベル物理学賞受賞)らもいた。70年に米国に帰化。現在大阪大学には研究室を持ち招聘教授として研究を続けている(参考資料1)。

主な研究内容は以下の通り(参考資料2)。60年代、加速器の実験によって「ハドロン」と呼ばれる多くの種類の粒子やその反応の起こりやすさなどのたくさんの実験データが得られたものの、理論的研究は混沌としていた。この時代にハドロンを構成するクォークの存在が提唱されるが、理論的な困難を内包していたクォーク模型の困難を解決するためにクォークの持つ自由度としての3「原色」をもつカラーチャージの導入を提唱。これは後に発展する量子色力学(Quantum Chromodynamics)の基礎をなす。また61年、素粒子の質量の起源という根本問題に挑戦し「自発的対称性の破れ」というきわめて重要な概念を発見した(注1)。これはその後、現在話題となっているヒッグス粒子の考え方に発展している。また弦理論の創始者の1人としても知られる。70年にハドロンの性質を記述する模型として弦理論(ひも理論)の提案をおこなった。当時はゲージ理論としての量子色力学が確立していった時期でもある。ハドロンの弦理論はその後、現実の世界を説明しきれない困難が見つかり、クォーク模型や量子色力学の台頭とともに多くの研究者は弦理論から離れていった。しかしその後、J・シュワルツらにより素粒子の「超対称性」の考えを取り込んだ「超弦理論」が、重力を统一的に説明できる有力な理論として80年代時代を超えてよみがえり脚光を浴びるようになった。

理論物理学におけるパイオニアとしての貢献により、ウル

フ賞やベンジャミン・フランクリン・メダルを受賞。08年、ノーベル物理学賞を受賞。

本人が一般向けに書いた著書は多くない(参考資料2)。南部の経歴・人柄に関するものは資料3に詳しい。

南部に関するエピソードをいくつか。

1) 「大阪市大での3年間は年長の教授がおらず、学生が少ないため講義の負担も少なく自由を満喫できた。」

2) 80年代だったと記憶するが、筆者は南部の講演を京都で聴いたことがある。南部は、「私の日本語は戦後の一時期から進歩していません」と断ってやや古めかしい日本語でしゃべった。

3) 「私は、計算はだいたい頭の中でやります」とあるインタビューで答えている。わが国における最初の本格的天才にとって頭の中でやるほうが紙に書くよりはるかに速いし、先が見える、将棋の名人と同じである(参考資料4)。

4) 04年のノーベル物理学賞はクロスらに送られた。基本的な力「強い相互作用」の解明に貢献したことが受賞理由。ノーベル財団が発表した解説記事の中に南部の名前もある。その記事では「南部が作った理論は、理論としての必要十分な詳細さを備えていたが、登場が早すぎたのと、当時の別の問題に対して焦点が向けられていた」と異例の言及があった。(参考資料5)

5) プリンストン高等研究所時代、量子力学を頑固に拒否していたA・アインシュタインを説得しようとした逸話がある。物理学の根幹にわたる議論を若かった南部と老天

オの間でどのようなようになされたか興味深い。

6) 研究のモットーは論語の「学而不思則罔。思而不学則殆。」(学んで思わざれば則ち罔(くら)し。思うて学ばざれば則ち殆(あやう)し)。(参考資料5)

注1: 簡単な例で説明しよう。

今完全に丸いテーブルの中心に棒を一本垂直に立てておく。テーブルを回転しても、何も特別な方向はないので回転対称性がある。ところがなんらかの拍子に棒が倒れてしまふと特別な方向が発生し、この回転対称性は破れてしまふ。このように、力学の基本方程式は対称性をもつのに、そこに生じた基底状態の対称性が破れる現象を、「自発的対称性の破れ」という。

参考資料

1) フリー百科事典ウィキペディア(Wikipedia): 南部陽一郎
2) 『クォーク 第2版―素粒子物理はどこまで進んできたか』ブルーバックス、『素粒子の宴』南部陽一郎、H・D・ポリツァー、工作舎

3) 日本物理學會誌 Vol.32, No.10(1977) pp. 773-778; 日本物理學會誌 Vol.57, No.1(2002) pp. 2-8; Modern Physics, 12 Dec. 2006; サイエンスフィック・アメリカン、1995年2月号。

4) http://jimishimura.jp/tech_soc/chem_todaynanbu/chem_today0903/09_03.htm

5) 「物理学とともに歩む」高エネルギー加速器研究機構サイト。

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

一、島木赤彦 3

茂吉が帰国した大正十四年五月赤彦は茂吉と木曽福島で会い、鞍馬溪、氷が瀬に遊んでいる。そしてこの時のことを、

わが友と御嶽山の雪は見てなほ峽ふかく入り行かんとす

（『柿蔭集』）

と詠んでいる。歌の通り、二人は「峽ふかく入り行」き、競詠を続ける。作品は二人の代表作として残る充実したものとなる。茂吉は百四十首余を、赤彦は一月遅れで三十四首をとものに「改造」に発表した。「こころ細りしにやあらむ山にして漆の芽さへかなしきものを」「こもり波あをきがうへにうたかたの消えがてにして行くはさびしゑ」（茂吉）、「岩あひにたたへ静もる青淀のおもむろにして瀬に移るなり」「石楠の花にしまらく照れる日は向うの谷に入りにつけるかな」（赤彦）がその例である。赤彦は中村憲吉への手紙に、「茂吉君の改造の歌『木曽』非常によく驚嘆せり、永久的のものもありありと思ふ。小生のは十月号に出る、とてもかなはぬ」「如

何に斎藤なりとも百以上は生意気なり、希薄ではないかと思ひ（中略）。どうして希薄なんといふ代物でない。小生木曽の歌斎藤と競争のつもりなりしも負けたり」（大正十四年九月十四日付）と書いている。

みちのくの谷川はたの杉黒し茂吉が生れし家の屋根見ゆ

大正十四年『柿蔭集』

題に「秋田行」とあり、「多年の望みなひて十月三十一日夜百穂画伯の郷国に向ふ」と詞書がある。アララギにとつて大恩人ともいふべき平福百穂は秋田の出身で、その帰省に同行させてもらったのであるうか。途中、奥羽本線の汽車の窓から上ノ山あたりで金瓶の茂吉の生家が見えたというのが一首の内容である。

二、中村憲吉 1

中村憲吉は茂吉にとつては「アララギ」とともに隆盛に導いた歌友である。若いころ、東京を離れるまでは茂吉とよく飲み歩き、彼を部屋に泊めることもあった。藤岡武雄氏作成の年譜から二人の交友を拾ってみると、たとえば大正四年には、「二月六日 中村憲吉を訪ね、ともに浅草『ヨカロー』等のみ歩き、酔ばらつて憲吉の部屋に泊まる」「二月八日

中村憲吉を訪い、ともに『鳥又』で飲み憲吉の部屋に一泊する」「二月十二日 中村憲吉を訪ね、古泉千樫と三人で『ヨカロー』等で飲み、憲吉の部屋に泊まる」「二月二十二日 いろは館に島本赤彦を訪ね、古泉千樫、中村憲吉ら四人で飲んで一泊する」「三月十日～四月十五日 憲吉と飲み歩くこと甚だしかったため、痔を患い臥床した」等とある。

春の野をながるる水のさらさらと振る舞ふ君を憎しと言はむ

明治四十三年『馬鈴薯の花』

「歌会の歌」と題する三首中のものである。茂吉や憲吉たちは短歌を作り始めたアララギ初期のころから、三、四人集まってはよく歌会を行っている。初・二句の比喩による序詞は茂吉の活発なようすを巧み表現している。この活発さは歌にかかわる態度をいうのであろう。

九月なかばはじめて開くアララギに吾を咎むる君が歌
を見たり

病癒えし妹をつれかへり落ちつかぬ心夜ぶかし君が歌
みつ

約やぶる吾はくやみ居るしかるゆゑただ一向に言を荒
ぐな

これは歌集には収められなかった一連で、「アララギ」大正六年第十一号に載ったものである。題を「茂吉に答ふ」としている。憲吉は前年東大を卒業して秋に故郷の広島に帰っていた。それに加えて病気の妹の世話もあった（二首目）ため「アララギ」の原稿が遅れたらしい。それを茂吉が、

約やぶる友のこころの驚けり古泉千樫と中村憲吉と

と歌によって答めているというのが一首目。三首目では、遅れたことを反省しているのだからそうむやみに非難するなと抗議している。明治末から互いに泊まり歩くほどの仲であつたから、茂吉の歌も戯れ歌のたぐいであり、応える憲吉の歌も同類と言つていいだろう。

それから十数年後になるが、茂吉が憲吉に仕事の遅れを歎き催促する手紙がある。「選歌一人届かぬと印刷屋に送られぬのでたいへん困る。普選や何かで忙しいだらうがこの際は非たのむ。アララギは大に心配して緊張する必要あり」（昭和三年二月五日付）がそれである。この「心配して緊張する必要」というのは、もつとアララギのことをまじめに考えろということであろう。

憲吉は、大正五年、東京を去り家業に就く。大正十年には新聞記者として大阪に住むことになる。

山の辺の道への思い (2)

夏目勝弘

三輪山をしかも隠すか雲だにも情あ^{こころ}らなも隠さふべしや

(二一八) 額田王

山の辺の道は三輪山の南西麓から大和平野の東側の山裾
ぞいに、石上布留を過ぎ高円山西麓につづく道。

石上布留の高橋高高に妹が待つらむ夜ぞ更けにける

(十二二九九七) 作者未詳

この橋の上に立つてからもう二十数年になつてしまつた。

山の辺の道への切掛は、御津先生が三輪山神社の御神体の、三輪山の古代のまつりの場の磐境^{いわさかい}を見てこられ、話しをされた。その時ぜひ見たいものだと思ひ立ち決行。

磐境は見られなかった、その足で山の辺の道を歩き、石上布留まで来て夕方となり、後はまたにしようと、そのまが今日になつた。

万葉まほろば線で、京終^{きやうはて}まで戻る。奈良から行くより、白

毫寺までが近いこともあるが、石上よりの続きでもあるため。

三輪山より石上までの山の辺の道らしい道は残つてはいないだろう。

昼には少し早い、白毫寺までの道も聞きたい、ラーメン屋が目についたので入る。ラーメン、ギョウザ、ビールでの昼食。道を聞くと観光用の地図をくれた。五万図と比べ道順を確認、ほどよい腹かげんとなりまた歩き出す。

いにしえにありけむ人もわが如か三輪の桧原にかざし折

りけむ

(七一八) 人麻呂歌集

歌のような桧原も、田畑も少ない、奈良のベッドタウン的な街、市営住宅的なビルの間の道を抜け、山の辺の道らしい所に出た。

三笠山を目差して行けばと、時々山並の方を見ながら行く、小さな流れに出る。

能登川の水底さへに照るまでに三笠の山は咲きにけるかも

(十一八六一) 作者未詳

これが能登川か、三笠山の満開の桜を映す能登川を見たいものである。今は冬枯れの川辺に高々とコウテイダリアが紫の花を咲かせているのみ、しばらく橋の上から浅い流れを上流を下流を見ていた。

以前歩いた山の辺の道の思いが次つぎと甦える：香具山は畝傍ををしと耳成と：(一一三)

中大兄皇子の長歌の三山が、東方を見れば巻向の穴師の山。

あしひきの山川^{やまがわ}の瀬の鳴るなべに弓月が岳に雲立ち渡る

(七一〇八八) 人麻呂歌集

今日の弓月が岳も大和平野も初冬の青空の下に広がっている。

巻向川に回っていたあの水車は、今も回っているのだろうか、もう一度いつてみたい。

思い出が鮮明に次々と浮んでくる。能登川の小さな橋の上で時間をとってしまった。

まだ道半ば、現実に戻り歩みを早め三笠山の冬枯れ色の丸味を帯びた山の線に、少し落ち付いた気持になった。

(以下次号)

「氷魚」のことから (136) 岡本八千代

あの大自然の破壊力に戦^{おの}いた三月十一日が一年をすぎつつある。

庭には馬酔木の花が今朝の日の中にゆれている。——この当り前のような常の一日がはじまろうとするありがたさ、の私。

「当世媛鏡」 むらさき（子規）のあらずじ。

三。（才吉とお清の態度が變つて三年後）

○時は、徳川三百年の眠りはさめて、黒船の到来の時。

○小萩昌之助は、妻・ためと幼い倅^{せがれ}と義理の妹とよを残して、彰義隊に加わった。

彼は、「死出の旅立に一生の花咲かすべし」と武士としての心意気に燃えていた。彰義隊は上野に立籠った。（二月～五月）

四。その年（慶應四年（1868）の五月）

○小萩昌之助は、上野の森の木の間伝いに進んでゆくと、手負^{てお}を受けて倒れている少年に出合う。——左の袖には滴たる血汐^てのその少年が片間千之丞であった。

○昌之助は少年に「後日のために、ここを逃れて後のために働け」とさす。

○千之丞はここから逃れる。この時、昌之助は「家族をたのむ」と言い残す。家族とは、昌之助の義理の妹とよのこと。

○千之丞は、上野の裏手の田圃道をさまよいながら歩いていると一人の女に出会う。

○その女は「片間様」と声をかけた。それはおとよであった。日頃おとよは、千之丞を恋しく思っていたのだった。

五。（明治五年ぐらいの初夏）

○世の中、がらりと変わった今は、小萩昌之助も戦に負けただけで手傷を負わず家に帰ることができた。

○そして、昌之助の妹おとよも片間千之丞に嫁いだ。

○小萩一家は、二人の男の子に死に分れ、ただ一人才吉を得たのだった。

○小萩昌之助は一歳の才吉に書置一通を血の中に残し、腹十文字に掻き切った。

○その後、おとよも千之丞との間に一女をもうけ、清^{きよ}と呼びつくしき育てた。が、清は大病にかかり、命も危うくなった。しかし、おとよは浅草の観音様を信じ祈り清は助かった。

○ところが、おとよは病氣になって死にそうになった。おとよは、自分が死んで継母にかかるよりはと、姉上のために「育ててほしい」と頼む。しかも、「やがては才吉と清を夫婦にしてほしい」と頼み、息絶えたのであった。

○おためは自分の命もわからないと思ひ、二人のいる処で、親父殿の遺言書を才吉に渡す時に、そこへ金貸の河瀬山次郎という人が訪れてきた。

○才吉は、遺言書を持って書齋に入り、お清も次の間に^{すべ}り出てしまった。（つづく）

ことのはスケッチ(40) 今泉 由利

『あや叔母様』

今から百年ほど前のこと、豊橋の飯村の地主、磯部英一、こう夫妻に、長女「よね」が誕生。後、男子三人、十年目に末っ子の次女「あや」の誕生。

この姉妹の、たぐい希^{めづ}な美しさ、「どうしてこんなに美しい人が身近にいるのだろう」と物心ついた時から思い続けている。私の感覚なのだけれど、「ミロのビーナス」を少し日本風にしような「よね」の奥深い美。

「あや」は、「メリナ・メルクル」をやさしくしたような、外に発散する美。姉妹兄弟共に、日本民族の顔たちではない不思議。

「よね」は幼少より文学に親しみ、短歌を詠む医学生、今泉忠男と婚姻。六人の子供の母となる。

「あや」は、姉の文学と同じことをしたくないと「バスケット」を選び、昭和十五年、奈良で開かれた全国大会にまでも出場する活躍。背は高く、美しく、運動能力に長け、かつ聡明。名声は彦根城まで届き井伊家勘定奉行の家系北川の「日本一の花嫁探し作戦」に見い出され、懇願され、四人の子供の母となる。

夏休みになると御馬の海水浴場へ。あや叔母様に連れられた子供達と今泉の私達との交流。

東京で板前修業をした料理屋の浜棧敷で味わった三河湾の魚。黒鯛のあらい、塩焼、潮汁……。生涯忘れられない味を

いとこ達と共有するのです。

また、名古屋の北川家に泊り、中日球場での野球観戦。はじめて口にした美味の数々今でも身体に残っている。

私は、母の松阪屋への買物にもいつも付き添った。あや叔母様のお家に寄れるから。

その頃、北川家の北九商店は、イタリアの老舗とデザイン提携した袋物類を扱い、日本の流行をリードしていたのです。おばさまは「好きな選んでゆきなさい」と言って下さって、選ぶのがうれしかった。そのハンドバックをもって、注目を集めていたのですよ。

「アルゼンチンへ行こうかな」と言い始めた時も、叔父様叔母様、励まして下さって、実行しました。

アルゼンチンより始めた三河アララギへの短歌や随筆もしっかり読んで下さっていて、叔父様は「この前の会合のスピーチで、由利の随筆を引用させてもらったよ」とか、コメントを下さいました。

叔父様と叔母様とを、どんなに自慢に、どんなに心強く思っ生きてきたことでしょう。どの場面を思い起しても、本当に素敵でした。

つい先日。玉由の仕事、NY^{ニューヨーク}というアメリカの歌手のコンサートを、東京、名古屋、神戸で開きました。名古屋の時、玉由を連れて叔母様に逢いにゆきました。

安心と親しみと、玉由のこれからに、素晴らしい出会をよろこびました。

叔母様は、WOWOWのNBA（北米のプロバスケットリーグ）をいつも見ておられました。玉由がWOWOWのひとつの番組をプロデュースしたことをお知らせ出来なくなっていました。

和菓子街道 (67)

<http://www.trad-sweets.com/>

平 松 温 子

水口の宿を出てからは、横田の渡しのあった横田川(野洲川)を渡って石部を目指す。途中の大沙川、由良谷川は天井川で、トンネルになっている川の下を潜って渡る。江戸時代にはこの辺りはところてんが名物だったそう。汗だくになって歩いてきた旅人には、ひんやりと冷たいところてんはたまらないご馳走だったはず。

落合川を越えれば間もなく石部宿だ。「京立ち石部泊まり」の言葉通り、京都から江戸に向かう旅人が最初に宿をとったのがこの宿場町。古くから金が採れた土地で、堅実な人の例えとして知られる「石部金吉」もここから出ている。

石部宿で見つけた旅のお供は、明治 43 年創業の谷口長栄堂の「石部太鼓」。



鹿塩上神社の大祭で打ち鳴らされる石部太鼓にちなんだ最中だ。静かな宿場通りも、祭りとなると太鼓の音が賑やかに響くのだろう。

太鼓型の最中の中には、餡がぎっしり。

◆谷口長栄堂

住所：滋賀県湖南市石部西1-8-13

電話：0748-77-2101

お知らせ

▽六月号原稿は、五月一日(火)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返送用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

△毎月「感銘歌」として「ノボタンの窓」より二首づつ抜粋して掲載していますが、その「ノボタンの窓」の書名は磯夫先生が師の土屋文明先生からいただき帰途の夜行列車で二花開きはじめた、そのノボタンに因んだものだそうです。一つの花が受け継がれ数多の花を開花させるように私達の短歌も師から受け継ぎ、それをさらに発展させることが受け継いだ者の使命かと思えます。受け継がれてゆく歌でありたいと思います。

△「私の二首」は毎月の歌稿に同封して、東京の今泉由利宛にお送り下さい。

(平松)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月日より、半ヶ年分一万円、一ヶ年分二万円の割で前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十四年四月二十五日印刷 第五十九巻 第五号
平成二十四年五月一日発行 定価 六百円

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘
平松 裕子・山口 千恵子

発行人 発行所

今泉 由利
三河アララギ会

三河アララギ発行所 千四四一〇三二一
豊川市 御津町 御馬 西三七
TEL (〇五三三) 七五二〇〇九
振替口座 〇〇八三〇一六 五六三九
E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp/
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>
印刷所 株式会社 桜創美